

上りて、繩をほどきて、支度をなをし、召人駕籠に乗せられて、いそぐつゝ、みの庭の道、寒さはいとい身にしみて、比は卯月の十三夜月の影さへはれやらぬ心の底はとこやみのあやめもわかぬくらまぎれ、夜更けて京へ着にけり。其夜は牢屋敷の會所に置かれしが、翌十四日揚り屋を掃除して入れらる。……………向ふなりける十二疊敷の内には鷹司殿の大夫なる御方青木右京之介殿、隣なるは二條殿の大夫入江伊織殿、此方には皆水戸一件の御儀につき捕となりしなり、晝夜番人六人つゝ、寝ずの番一時替りに入替る、七分三分の夜廻りあり、嚴重なること恰もゑんま王廳の如し。……………

(つづく)



水仙花

雨峰生譯

谷また山を漂へる  
孤雲の迹のさためなく  
淋しくわたり彷徨へば  
時しも目には一むれの  
白衣金冠の水仙花  
湖の畔や梅の蔭に  
風にゆられてゆらくと  
踊る姿のふと見えぬ

天の河原の明らけく  
星の光りの断間なく  
閃さわたる風情にて

湖入江なす岸縫ふて

見渡す限り廣ごりぬ

ちらと見し目に其數は

千萬わりと見ゆるまで

花を簪せる頭をば

楽しく舞を爲すがごと

ふり翳せるぞうれしけれ

花に沿ひたる細波は

共に躍りつ見ゆれども

花はそれともいやまして

喜ひあふるけはひかな

詩人はかゝる頼もしき

友だにあらばまたさらに

樂しみたえてなくもがな

かくて深くも凝視れば

思ひえしらぬ何ものゝ

われに景色をかくまでに

實ところは見せしよな

さはれわが身の情なくて

氣もむすげれつ臥床にて

思ひに沈む其折りに

かの花影は眼底に

孤筆をいやす賜と

あふるゝまでにきらめきて

われとわが身を忘れつゝ

花水仙の舞ふ如く

わが身も共に躍るなり

御苑の菊

東くめ子

都のうちに

身はありと

思へと思へと

おもはれぬ

み池のすがた

山のさま

こゝや浮世の

外ならん

たゞ忘れては

み山路に

紅葉狩すと

思ふかな

夕日梢に

うつろひて

見る目映ゆき

秋の光